

海軍予備学生の思想・素描

山口 宗之*

A Sketch on a Thought of the Naval Reserve Officers

Muneyuki YAMAGUCHI

Abstract

1. Naval Reserve officers desired enlistment in the Navy because they greatly disliked the Army;
2. After enlistment, Naval Reserve officers received worse treatment than the regular officers from the Naval Academy;
3. Therefore, some Naval Reserve officers progressively came to greatly dislike the Navy;
4. The cause of the harsh treatment of Naval Reserve officers stemmed from the fact that they drilled together in the same units with regular midshipmen from the Naval Academy.

はじめに

海軍予備学生は正規将校の不足を補う予備要員として教育された学生をいう。その創始は明治37（1904）年制定の海軍予備員条例および大正8（1919）年改正の条例にもとづき文部省直轄高等商船学校生徒が兵籍に編入されて予備生徒となり、水産講習所遠洋漁業科出身者も希望により予備生徒に採用され、それぞれ海軍の専門教育を経て海軍予備少尉あるいは予備機関少尉に任用されたことに発する。

その後、昭和9（1934）年10月19日条例が改正されて航空予備将校制度が加えられ大学および予科、高等・専門学校卒業生中の志願者を選抜し、航空機搭乗員として1か年の教育を施してのち予備少尉に任用した。さらに同13年から航空隊整備科にも適用され、大東亜戦争中には時局の要請にもとづき一般兵科にも拡大されるに至った（『国史大辞典』）。

この中であって飛行科予備学生は昭和9年から20年8月終戦に至る11年間1～16期にわたり、昭和18年創設の予備生徒¹⁾は1～3期に及んで合計13,568名が採用され、2,481名の戦死者を出した。また昭和19年10月からはじまった特攻作戦においては士官搭乗員の85%が予備学生・予備生徒出身であったのである²⁾（海軍飛行科予備学

生・生徒史刊行会『海軍飛行科予備学生・生徒史』³⁾昭和63年・非売品1頁〈以下、『史』と略称〉）。

しかし、制度発足当初から「いやしくも海軍将校たるものは、正規の教育を受けたものでなければならない」といい（『史』13頁）「第一線指揮官は兵学校出身の正規将校でなくてはならないという伝統的な意識が支配的であったため」（同20～21頁）海軍部内に強い反対意見があったといわれる。

以下、彼ら予備学生・生徒らがいかなる動機から海軍入りを決めたか、入隊後どのような差別を受けたか、それに対しどう反応したか、なぜ差別されたのであろうか、等の諸点について史料に即し考察を加えたい。用いる史料は多岐にわたるが、制度・通史的な事柄については『史』を中心とし、随時個人の公刊された著作を利用した。対象は大多数を占める飛行科が中心となるが、“出陣学徒”の観点から一般兵科、主計科（見習尉官等）関係者にも視野をひろげることをおこわりする。

1. なぜ海軍入りを決めたか？

明治憲法に兵役の義務が明記されていた当時の学生たちにとって徴兵猶豫の年限が切れれば軍隊に入ること疑問の余地はなかった。昭和18年10月勅令「在学徴集延期臨時特例」により満20歳に達した学生・生徒はいっせ

* 教養部

平成10年9月9日受理

いに徴兵検査を受け、甲種・第1乙種・第2乙種は現役兵として、第3乙種は補充兵召集のかたちをとって陸軍は12月1日、海軍は12月10日、それぞれ指定する部隊に入隊せしめた。いわゆる“学徒出陣”がこれである。いっぽう理工医系学生・生徒および教員養成学校在学生に対してはしばらく入隊延期の措置がとられ、身体虚弱者は丙種として国民兵役編入となり丁種（不合格、兵役免除）とともにさしあたり学業継続が許されたのである。

徴兵検査に際し学生・生徒たちは徴兵官（陸軍佐官）に対し陸・海軍の志望申告を許されたが、多くの学生が海軍を志望し徴兵官の気分をひどく害したという。⁴⁾海軍志望を許されたのは第2乙種以上であったが、この年12月10日、最下級の2等水兵として指定された海兵団に入隊し、約2か月間新兵としての訓練を受けたのち翌年2月、第14期飛行専修予備学生、第1期飛行専修予備生徒として計5,542名が採用された（『史』47頁）。“学徒出陣”に先んじ昭和18年5月、予備学生大量募集に応じた13期5,200名は9月30日、入隊・命課され訓練に入っていた（『史』44～45頁）。彼らは新兵生活を経験することなく採用と同時に学生身分（准士官の上、少尉候補生の下）とされ、この点14期と違うが、13・14期ともに特攻戦死を含めもっとも多くの戦没者を出したクラスであった。なお1～15期、予備生徒1～3期にわたる年度・期別の採用数を次表に掲げる。

期	入隊年月	採用人数
1	昭和9/11	6
2	10/5	15
3	11/4	17
4	12/4	14
5	13/4	20
6	14/4	30
7	15/4	33
8	16/4	43
9	17/1	38
10	17/1	100
11	17/9	101
12	18/4	70
13	18/9	5,200
14	19/2	3,334
15	19/8	368
〃	19/9	1,933
16	20/3	220
〃	20/5	170

第1期兵科予備学生 287

第2期同 551

整備科第5期 94

第1期予備生徒 2,208

2 〃 〃 574

(第3期予備生徒を含む)

(同 上)

(以上、『史』20～51頁の記述から作成)

それでは多くの学生が陸軍を嫌い、海軍入りを望んだのはなぜであったろうか。

第1に中等学校（男子校に限る）以上大学に至るまで各校1人宛配置された現役陸軍将校の存在である。大正14（1925）年、勅令135号「陸軍現役将校配属令」にもとづき各学校長の指揮下に入り学校教練の授業を担当し「軍事教練合格証書」を授与する権限を有した。高等・専門学校以下では当初より必修であったが、はじめ選択科目であった大学においても昭和14年以降、必修となり出席不良者は大学卒業判定にも影響を及ぼすようになった。とくに「軍事教練合格証書」は徴兵による入隊後、幹部候補生（予備役幹部）採用への必須条件であり、それ故に配属将校の存在は学生にとって重いものであった。なかには東大初任の中村浜作大佐のごとく学生の取扱いに柔軟であり（照沼康孝「東京帝国大学に於ける軍事教練」『時野谷滋博士還暦記念・制度史論集』昭和61年、同刊行会）、昭和8年4月から4年間、新潟高等学校に勤務した池田廉二中佐のようにそのすぐれた人格を通し大きな教育的影響を残した人物もいたが（中島欣也『破帽と軍帽』昭和62年、恒文社）、戦時中陸軍の権力を背後に反感を持たれた人物も少なくなかったと思われる。⁵⁾

これに対し旧制一高時代と海軍軍人（主計科）時代を「微妙な接点を持つ」と考え「私の青春のすべて」と追慕する和田良信氏は昭和49年、題名もズバリ『白線と短剣』と題する自叙伝を著した。この中で和田氏は「長いのをぶら下げたカーキ色の陸軍将校」を本能的に嫌い、「海軍に対してはそこはかとなき好感を寄せていた」ことを率直に語っている。徴兵検査を前にした東大法学部学生間にあっても「海軍の人氣が圧倒的に強く」「陸軍の人氣が極めて低く、その分だけ余計に海軍の評判が上昇していたということは注目すべきことであった」といい、徴兵検査時、海軍志望者が多すぎたため非常な不安におちいったが、最後の段階で第2乙種合格・海軍入りが叶えられた歓喜の思いを記している（同書377～378頁、35頁、109～113頁）。

学生たちが陸軍を嫌った第2点は配属将校を通して伝わってくる情報の中で入隊後の内務班で初年兵に加えられる苛酷な私刑であった。幼年学校・予科士官学校の将校生徒といえども兵の最右翼待遇（上等兵のち兵長）として下士官以上への敬礼を義務づけた陸軍は、帝国大学出身者といえども入隊当初最下級兵の体験を必須とした。従って内務班において下士官・古年次兵から加えられる重圧について学生たちのよく知るところであった。

これに対し海軍はネービーブルーの制服・短剣姿で陸軍の泥臭さに対し断然、垢抜けており、学生たちはもちろん一般人をもひきつけるものを持っていた。⁹⁾昭和13年、中学校3年のとき海軍航空隊で2泊3日の見学旅行あり「誠に素晴らしく、漠然としてはいたが海軍はいい所だという気持ちが強く働」き「迷わず海軍予備学生を志願」(蛟竜艇隊第17期会『貴様と俺の青春賦』平成5年、勁草書房24～25頁)、「陸軍に入れば鉄砲をもって行軍また行軍の連続(中略)海軍は万事全てスマートでどっちにしてもこの戦争で死を覚悟しなければならないとすれば海軍の方が良いという決意で、海軍予備生徒の飛行科を志願」(同26頁)、「海軍予備生徒を志願したのは、陸軍がきらいだったからである」(同31頁)等の告白は枚挙にいとまがなく学生の大半はそうであったろうと想像するところである。また14期予備学生で兵科にまわった吉田満氏は戦艦大和に乗艦・出撃し九死に一生を得たにも拘らず「海軍とは短いつきあいだで失望の余地がなく、かえって純粋なあこがれだけが残っている」「予備士官でもそれなりにネーヴィー生活への愛着がある」とし、「海軍の仲間が持つ一体感は、同じ一つフネの上で運命を共にするという共感からよりも、偉大な海を相手にする人間の本能」に求め海軍への尽きぬ愛を語っている⁷⁾(『海軍という世界』『吉田満著作集』下巻、昭和61年、文芸春秋700～703頁)。

なお、戦後13期出身178名に対するアンケート調査によれば、志願の動機として、

国または同胞を護るため	33%
飛行機に乗りたかったから	22%

をあげているが、当時の学生の大多数はほぼそうであった。しかし、必ずしも海軍入りに直結するものではない。だが、

兵役に服するなら陸軍より良い	33%
海軍士官がスマートに見えた	12%

は重要であろう。半数近くが陸軍にないよさを海軍に求め、そこにある種あこがれをさへ抱いて予備学生の門を叩いたのである(『史』45頁)。

なお、13期とほぼ時期を同じくして陸軍特別操縦見習士官第1期の招募も行われた。陸軍伝統の必ず初年兵の体験をさせるという鉄則を破り、高等・専門学校在学以上の学歴ある志願者から選抜、入隊と同時に見習士官に任じて曹長の上位・准尉の下位に置き、帯刀本分という破格の待遇を与えたのである。⁸⁾しかし、13期青木保憲氏によれば台中高等農林学校同級生7名は、双方合格者

を含め全員が「海軍に憧れて」予備学生を志願したという(『史』303～304頁)。⁹⁾ともあれ、入隊を不可避の運命とうけとめた学生たちの大部分は重装備・歩く・不細工・泥臭いとみて陸軍を嫌い、海軍を「まだまし」あるいは「是非とも入りたいところ」とみて予備学生を志したのである。

2. 差別を受けたか？

前記、予備学生体験者へのアンケート中「予備士官ということで差別を受けましたか、もしあればその具体例も」という設問に対し、209名が回答している。

差別を受けた	69名
若干、差別を受けた	29名計98名

これに対し、
差別は受けなかった 111名
となり、差別がなかったとする者が過半数となっている。しかし、総数1万5千名近い体験者に対し、あまりにも少数の回答であり、また、この設問に「回答なし」が35名もいる事実をどう考えるか、等により「差別は受けなかった」が過半数といい切るに多分に疑問が残る。

つぎに回答を年次(期)ごとに整理すると、1期より9期(昭和17年1月)まで総数215名の回答者22名の中、

差別あり	10名
差別なし	11名
無回答	1名

となる。10～12期(総数271名)の回答者15名では、

差別あり	5名
差別なし	8名
無回答	2名

である。大量採用となった13期(総数5,200名)の回答者126名では、

差別あり	61名
差別なし	50名
回答なし	15名

つづく14期(総数3,334名)の回答者81名では、

差別あり	22名
差別なし	42名
無回答	17名

となっている。このうち12期までは終戦時、大尉～少佐となっており、1～10期中78名は現役将校を志願・転換している事情を考える必要があろう。また、13期は特攻戦死がもっとも多く、14期がこれについている条件を勘案するとき、13期回答者の過半数が「差別あり」と答え

たのは切実な意味をもつというべきである。

つぎに差別の具体例である。1～12期までは回答少なく「服装・進級・功績での海兵士官との差別」「君達は予備(スベア)だと頭からいう」「予備士官制度を知らないので職業士官・下士官がライバル意識」をもった、等である。

ところが、大量募集され戦没者も多数にのぼった13期の回答例は切実である。まず「海兵の飛行学生(少尉)が入隊最初の夜、徒党を組んで押し寄せ、一人ひとりに『〇〇予備学生』(既に少尉)といわせて侮辱した(筑波空戦闘機)」にはじまり、訓練開始されるや「兵学校出の分隊長は、常に『予備士官出』はという言葉侮辱的に使い(明治基地紫電)」「基礎教程の土浦空では、予備学生(士官)に、新兵の黒帽をかぶせ」「飛行長、隊長、分隊長の海兵出は、兵学校出士官の『飛行訓練』を優先(上海256空雷電)」「戦闘機実用機教程で、飛行学生(72期)は零戦使用、士官宿舎、従兵付。予備学生は、エンジンの悪い九六戦、大広間での雑食寝と一膳飯(大分基地元山空)」と驚くような差別例が語られる。

しかも、特攻出撃について「海兵出を温存し、予備士官は消耗品扱(百里原空艦攻)」「消耗品ということで、真先に戦場に行かされた(901空大艇、大津空)」「海兵出が飛ばないので、ほとんど予備士官が飛んだ(936空)」「飛行訓練は、海兵士官優先、沖縄戦では彼らを温存し、予備士官を投入した(701空彗星)」等々、枚挙にいとまがない。

いっぽう、14期では「差別は受けなかった」が多数であるが、それでも「宇佐空は、海兵出の『メッカ』。73期の同じ飛行学生と、訓練、待遇で大いに差別され」「『娑婆気の抜けない予備士官』と、任官後も修正された(北浦空)」「お前達、予備士官が『光輝ある海軍の伝統』を汚したと常習的にいわれた(鹿島空要務士)」「訓練中は常に差別されたが、実施部隊では比較的に恵まれた(201空夜戦)」などが具体例として挙げられ、13期と基本的に違いはない。これらは総数に比し、ごく少ない具体例であるが、決して嘘とはいえないであろう(『史』200～209頁、第9章アンケート参照)。

以上は飛行科予備学生の正史ともいえる『海軍飛行科予備学生・生徒史』の伝えるところであるが、昭和18年12月10日、「学徒出陣」により横須賀海兵団に2等水兵として入隊、翌年2月1日、第4期兵科予備士官に採用された武田五郎氏の場合をつぎにかえりみる。武田氏が「海軍を志望したのは、現在もっとも必要とされている

飛行機乗りとなりたいから」であった(同氏『回天特攻学徒隊員の記録』平成9年、光文社)。

昭和19年11月26日、昼近く人間魚雷回天隊に配属された武田氏ら予備学生30名は、下士官200名とともに基地のある山陽線光駅に到着、手に棒をもった海兵出身中・少尉たちの命令で、部隊正門までの5～6キロを隊伍を組み、棒でこづかれながら走らされ、着任申告後「寄ってたかって我々一同、顔の形が変わるほどぶん殴られ」「軍隊に入る前の徴兵検査で海軍を志望した我々の気持ちを、みごとに踏みにじってくれた」体験をもって訓練が開始された(同95頁)。¹⁰⁾しかるに翌年3月末、海兵74期の少尉候補生50人ほどが入隊してきたときには、棒をもったの出迎え・かけ足はなかったという。ところが、入門時、足並みが不揃いなをみた予備学生出身の副直将校今野剛が、部隊正門から本部玄関まで何回もやり直し往復させた。このため今野は海兵出士官から呼びつけられ、散々殴られたその夜、予備士官全員が整列を命じられ、先任将校から「貴様に、海兵出の候補生の教育を頼んだ覚えはない」という叱咤のもと「海兵出の士官は、総出で学徒組の修正に取りかかった」という。そして武田氏は「もう書きたくもない。(中略)彼等にとってもまた、我々はまことに招かれざる海軍少尉だったのであろう」と結ぶのである(同141～143頁)。

武田氏と時を同じくして、海軍に入り回天搭乗員として出撃直前、終戦を迎えた神津直次氏は長崎県川棚の魚雷艇訓練所で「回天隊に海兵出が少ないのは、なぜでありますか」と問う友人の一人に対して、引率者の海兵73期少尉は「言下に、『もったいないからな』続いて解説していわく、『海兵卒業者は(中略)現役が六千人、それに引き換え、大学生(予備学生)や中学生(予科練)¹¹⁾は、いくらでもいる』」との答えを得たとする(神津氏『人間魚雷回天』文庫版新戦史シリーズ⑧、平成7年、朝日ソノラマ、42～43頁)。また、昭和20年6月のある朝、海兵74期のほやほやの少尉候補生が軍人勅諭五か条を六か条とあやまり、予備学生出身の和田少尉が説諭に赴いたところ、海兵73期中尉グループから、さんざん吊し上げられる始末となった。これを不服とする先任古参の予備学生出身上山春平中尉が73期新米中尉をしめ上げたところ、今度はそのまた上の海兵出の男に呼びつけられ、上山中尉はコテンパンに修正されたという話をひき「予備士官には、もう上がありません。いろはカルタにありました」と漫画的にまとめた(同197頁)。そして、

回天隊に予備学生というエタイの知れぬ者がチンニュー

ウしてきたとき、海兵出の士官たちは、情弱な学生あがりに対するには、あのやりかたを適用するのが最善と信じ、兵隊を殴る下士官の役を自分たちで引き受け、実行したのだった。だが、制裁を受けた私の心の中は、どうか。第一に『帝国海軍』なるものを骨の髄から嫌いになった。海兵、海機¹²⁾出身者を心の底から憎むようになった（同83頁）。

と、明記するのである。

以上2例は、海軍を「骨の髄から嫌い」「心の底から憎むようになった」神津氏、「戦争末期の日本の軍隊の断末魔の姿」を「五十余年前に、異常としか表現しようのない体験」を通して知り、戦後50年間、回天についていっさい語らなかったが、「そのあまりに異常な、狂気と言われても仕方のない部隊の実情を、文字にするには忍びない気持ち」をおさえ、「その真実の姿を書き残すことが、せめて生き残った搭乗員の義務であり、責任であろうかと思うようになって」、平成9年11月公刊にふみ切った武田氏（『回天特攻学徒隊員の記録』5～8頁）のごとく、予備学生時代ないし海軍そのものを批判的にとらえた側からの発言である。

しかし、いっぽう今なお海軍を愛惜し、予備学生時代を忘れがたく位置づける側にあって、和田良信氏は現役士官との間の「微妙な違和感というものは、やはり無視出来ないものであった」と率直にのべている（『白線と短剣』153～154頁）。たとえば、昭和19年5月27日、特別上陸帰省して隊に戻ったその夜、海軍経理学校¹³⁾を2番で卒業したという水野分隊士から返事の仕方が悪かったという理由で猛烈な制裁をうけ顛倒失神、そのまま何回も蹴られ「顔面のヒリヒリする痛みと、右膝関節のズキズキする痛み」を負い、軍医の診察を受け全治10日を要したという。しかし「今でも残念に思うのは、いかに教育中とはいえ、既に士官の地位にある者を足蹴にした、ということである」との感想をもちするのである（185～189頁）。また、兵学校・機関学校・経理学校出身の現役士官の「妙なエリート意識は、とくに予備士官に対しムキ出しに現われることが多かった」事実をみとめ、「予備士官に対する差別が、しょせん人間の集団である海軍に如何なる屈折を与えたか、（中略）どれだけ人間関係をゆがめたことか」という（同303～304頁）。そして、航空特攻戦死士官769名のうち650名、84%が予備士官であったことに対して「その大いなる犠牲は痛ましい限りである」とのべ（同305頁）、差別の存在を率直にみとめるところであった。

そして、このことはかの令名高き海軍讃美作家阿川弘之氏¹⁴⁾も武田氏『回天特攻学徒隊員の記録』推薦帯封のなかで、

著者が五十年間の沈黙を破って明かす「回天」特攻基地の実情は、鬼気迫るものがある。リベラルで評判のよかった海軍に、滅亡寸前、狂気と不合理の瀰漫して来る模様が、ありありと描かれてゐて（中略）深く考へさせられる貴重な労作だと思ふ。

とするし、現役士官から予備学生に加えられた差別の存在をみとめざるを得ぬところであった。しかして、それは「滅亡寸前」の海軍のみでなく、より早く昭和17年、兵科予備学生として入隊、通信課報に従事して、漢口で終戦を迎えた氏自身も、前記アンケート回答同期生と同じ事実を少なくとも客観的には体験していたはずである。

3. なぜ差別されたか？

それでは、予備学生は現役士官から、なぜ差別されたのであろうか。武田五郎氏によると、昭和20年3月のある日、光基地において整列した予備士官に対し、兵学校出身の前任将校の大尉はつぎのように叱咤したという。

貴様ら、海軍に入って1年足らずで少尉になりおって。我輩は海兵4年、候補生半年、少尉1年、中尉1年半で、ようやく大尉になったのだ。貴様らの襟章の桜は、ルーズベルトにもらった桜だ。ルーズベルトに礼をいえ（『回天特攻学徒隊員の記録』141～142頁）。

すなわち、第一に昨日までの大学生が1年そこそこの教育で、正規教育を受けた現役士官と同じ身分になるのがけしからぬという論理であり、そこに差別の根があったと考えられる。だが、もともと海軍は、士官に任用すべき者を最下級兵から出発させる手法をとらなかった。海兵・海機・海経生徒の身分を准士官の下、下士官の上に置いたことをはじめ、当の予備学生の身分も少尉候補生の下、准士官の上に置き、予備生徒も前記現役生徒に準ずる地位から出発させており、この点この大尉の言は妥当でない。ただ「学徒出陣」により、最下級兵として入隊した14期のみ例外で、2か月間、水兵生活を送った唯一のクラスが存在する。ともあれ、ストレートで士官になったこと自体、海軍にとって異常ではなかったはずである。

第二に昭和18年9月、13期の大量採用後、予備士官が急増し、同じ時期卒業の正規士官数に10倍するという事態¹⁵⁾に遭遇して、明治草創期以来の海軍士官の伝統が破壊されるという危機感のためではないかと思われる。も

ともと海軍では、高等商船学校生徒および水産講習所卒業生を予備士官として採用していたが、あくまで補充で少数、服装・昇進・指揮権等において当初より差別されていた(『史』12~13頁)。ところが、昭和9年6月、勅令によって予備士官から現役士官に任用される途がひらかれたこと(同13頁)、昭和17年11月、官制改革によって兵からたたきあげた士官に冠せられていた「特務」がとれ、表面上ともに現役士官として呼称されるようになったその矢先、同じ兵科士官として大量の予備学生が加わってきたのである。その中には、海兵出身士官と中学校時代、肩を並べる秀才で、旧制高校から帝国大学へ進んだ者もいたが、大多数は海兵進学不可能のレベルである私立大・専門学校・師範学校等を経由して採用された。しかも、彼らは海兵出をはるかに上まわる多数であり、そこに危機・焦燥もしくは優越感が働いた故とも考えられる。

しかし、それにしても疑問が残る。というのは、陸軍においても事情は同じであった。特操制度の発足によって、同時期航空士官学校卒業生(56・57・58期)に数倍する予備役将校が誕生していたのであるが、関係者の自伝・回想録等で陸士出身将校から差別を受けたという言葉をつきとめ得なかったことである。むしろ、特操出身者は陸士出身将校に範を求め、兄事する態度をとったケースが多かった(山口宗之「学徒出身見習士官の思想・素描」『皇学館論叢』30巻5号、平成9年)。特攻出撃においても、陸士出身の優秀な少尉が比島段階から列機として先発しており、士官総数597人中、現役は177人、29.6%を占め、海軍にくらべ、かなり高い比率を示している(山口宗之「特攻隊史研究の一視点」『久留米工大研究報告』18、1994)。また、陸軍では予備役尉官クラス将校を伍中に迎えるに慣れていたことが挙げられよう。すなわち、明治21(1889)年、中等学校卒業以上の学歴者から一年志願兵を募り、終末試験後なお4か月服務・合格者を予備役少尉に任じ、必要に応じ召集、小隊長たらしめたのは日清戦争当時からであった。その資質の向上を願って昭和2(1827)年、幹部候補生制度に改め、昭和13年、各地に予備士官学校を創設して、現役に准ずる教育を行った。その絶対数は尉官クラスにおいて支那事変当時、陸士出身将校をはるかに上まわっていたのである。しかも、現役操縦将校の養成は、航空士官学校においてこれを行った。従って、特操と教育の場を異にしていたため、同じ飛行隊で競合することがなく、陸士出身者を優先させる場が当初からなかった。また、実施部隊にお

いても初歩の特操に対し、陸士出身者はすでにひとレベル上の教官としての場にあった、等の事情が考えられるであろう。¹⁶⁾

しかし、海軍の事情は違っていた。すなわち、予備学生がとかく差別される第三の理由として、海軍の操縦教育では陸軍のような航空士官学校制度がないため、海兵出身現役士官(少尉候補生)と予備学生とが同じ航空隊で教育されたため、当然のごとく海兵出身者が万事優先され、待遇その他つねに上位に置かれ、上官(海兵先輩)もこれを当然視し、逆に予備学生の俗っぽさ、未熟ぶりをことさら対照させたのではなかったか。約言すれば、差別の根は「本職」と「助っ人」とを同じ場所で速成教育せんとした、海軍当局そのものの不行届にあったのではないかと推察される。極言すれば、差別の根は海軍の制度そのものにあったとも考えられる。

さればこそ注意すべきは、海兵出身者ないし海軍そのものに怨嗟の念を持ちつづける武田・神津両氏にあって、すぐれた人格をもつ海兵出身士官に対しては心から敬意を払い、賞揚の態度を払っている事実である。昭和19年9月、大津島基地の教官久住宏中尉(海兵72期)は回天7期予備学生を前に「大切な学問と真理の探求を投げうって、国家の存亡に身を捧げる諸君の心情を察すると、実に断腸の思い(中略)くれぐれも死に急ぎをしないようにしてもらいたい」と訓辞、武田氏をして「回天隊の生活の中で、一度としてこのような場面に会ったことがなかった。この久住中尉にはお会いしたかったという思いが募る」といわしめている(『回天特攻学徒隊員の記録』118頁)。なお久住中尉はこののちイ53潜で戦死するが、大津島時代、予備学生を殴ろうとする上級者(海兵71期)の前に立ちふさがって制止、彼自身がめっちゃに殴り倒されるというエピソードの持主であった(同116頁)。同じく神津氏も昭和20年8月8日、戦死した成瀬謙治中尉(海兵73期)を「海兵以外に人なしと、威張りちらすことなく、予備士官を同じ人間として見、同志として遇していた」と評価、「初対面からなんとなく好感を覚え」「ひたむきに生き、ひたむきに死んでいった。海兵出の典型」として長く記憶にとどめたのである(『人間魚雷回天』300~301頁)。

また昭和20年4月、片道燃料で沖縄特攻突入を目前にした大和艦上の情景をつぎのごとく伝える。

国ノタメ、君ノタメニ死ヌ ソレデイイヂヤナイカ
ソレ以上ニ何ガ必要ナノダ

という海兵出身士官に対し、予備学生出身士官は、

君国ノタメニ散ル ソレハ分ル ダガ一体ソレハ ド
 ウイフコトニツナガツテキルノダ (中略) ソレヲ更ニ
 一般的ナ 普遍的ナ 何カ価値トイフヤウナモノニ結
 ビツケタイノダ

と反論、論戦は乱闘の修羅場となった。これに対して士官一次室長白洲大尉 (海兵71期) は、

進歩ノナイ者ハ決シテ勝タナイ (中略) 敗レテ目覚メ
 ル ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ハレルカ 今日覚メ
 ズシテイツ救ハレルカ 俺タチハソノ先導ニナルノダ
 日本ノ新生ニサキガケテ散ル マサ二本望ザヤナイカ
 と、とりなした (『戦艦大和ノ最期』『吉田満著作集』上
 42～43頁)。これを聞いた海兵出身も予備学生も「誰一人
 反論できる者がなかった」 (『白洲大尉の場合』同205頁)
 という。そして、その深夜、数名の予備学生出身士官を
 集め、つぎのような短い話をしたと伝える。

一つは、俺は貴様たちのように人生を考えるのが好き
 だということであり、もう一つは、江田島出 (海兵)
 の若い連中は、あの世界しか知らんのだから勘弁して
 やれ、今日のところは俺に免じて収めてほしい (同、
 同167頁)。

すなわち、すぐれた人間性を持ち、広い見識に支えられ
 た人物に対しては、なぐりなぐられるという物理的関係¹⁷⁾
 を越えて予備学生出身士官が海兵出身士官を認め、
 景慕する態度をとるにやぶさかでなかったのであり、思
 えば当然のことであった。

むすび

“学徒出陣”前後、大学生たちの間には陸軍嫌い、海軍
 びいきの一般風潮があり、不可避の徴兵の前に多くの
 学生が海軍の門に入ることを望んだ。大正末期より学校
 教練が陸軍現役将校により実施されてきたことから、軍
 隊＝陸軍＝好ましからざるもの、とする図式が定着し、
 逆にネービーブルーの制服に短剣姿の海軍は、親しみの
 対象となった。事実、昭和18年12月10日、最下級兵とし
 ての学徒兵受入れに当たり大学毎の分隊を作り、練達の下
 士官を班長につけ制裁を禁ずるなど、かなりの配慮を
 示す面も持っていたのである。¹⁸⁾

このため学生たちは、時を同じくして行われた陸軍特
 別操縦見習士官召募が陸軍の伝統を破り、当初から見習
 士官として受入れられる破格の方式をとったにも拘らず、
 大多数が海軍予備学生を選んだのである。

しかし、大量の予備学生を受入れた教育現場において
 海兵出身現役士官による予備学生へのさまざまな差別は、

戦後50年を経てもしこり深く残っており、一部の体験者
 にとっては“帝国海軍”を嫌い、“海兵”を憎悪する心情
 を断つことができないほどであった。いっぽう、その差
 別をのりこえ、予備士官たることに誇りをもち、それ故、
 今日なお青春の一時期として忘れ難い追想の対象とする
 人も、もちろん存在した。

現役士官が予備学生を異端視し、よりはげしい制裁の
 対象とした背景には、未熟の大学生が一年そこそこの教
 育で兵科士官に大量に任命されたことによって、海軍士
 官の伝統が損われるという危機感もあったが、海兵出身
 現役候補生と予備学生とを同じ場所 (航空隊) で教育す
 るという方式に問題があった。陸軍では航空士官学校で
 現役士官候補生の教育を行ったため、各地飛行隊で実施
 した特操の練成と競合することがなかった。特操出身者
 の自伝・回想記に陸士出身現役将校からなされる差別的
 制裁の言辭がほとんどないのは、そのためと考えられる。

しかし、予備学生たちは海兵出に先んじて特攻に投じ
 られ、海軍少尉の航空特攻戦死者が海兵出身少尉に対し
 99%を占める (小論「特攻隊史研究の一視点」) という悲
 境に遭いながらも、すぐれた海兵出身士官をきちんと弁
 別し、尊敬した事実を忘れてはならないと思う。

註

- 1) 予備学生が高等・専門学校卒業以上の学歴を要求したのに対し、予備生徒は在学中で可とした。なお海軍生徒 (兵学校・機関学校・経理学校) に准ずる身分とし、准士官の下、下士官の上に置かれた。
- 2) 特攻戦死者数が最終的に確定できないため、いくつかの食い違いがある。筆者の試算による航空特攻士官 (少尉候補生～少佐) 戦死者は845名。うち予備士官697名、82.5%となっている (山口宗之「特攻隊史研究の一視点」『久留米工大研究報告』18, 1994)。
- 3) 昭和56年4月、編集計画が提案され、翌年、第1回委員会が開催されてのち、6年の歳月をかけ「総合的に一貫性のある記録として綴り」「追悼誌や回想録、戦記など数多く刊行されているが、予備学生・生徒11年間の通史に該当するもの」との自負をもって昭和63年4月、A5判510頁の大冊をもって刊行された (同1～2頁)。以下、本論において全体的記述は多く本書に拠っている。
- 4) 昭和18年12月10日、横須賀海兵団に入隊し、翌年2月、14期予備学生に採用され、主計見習尉官となった

和田良信氏によると、徴兵官辻岡中佐に対して「なんと出る奴、出る奴『海軍を志望しますッ!』と申告するため、「中佐の顔の不快な様子は、明らかに怒りの表情に変わり、検査再開時「午後の者は、みんな陸軍を志望するんだッ」と大音声で叱咤された。最後尾に近い和田氏は、その間を縫いやっと海軍志望がみつめられたという（同氏『白線と短剣』昭和49年、法玄寺出版部、111～113頁）。

- 5) 戦時中、第三高等学校配属将校草川靖大佐が、酷暑の日、一生徒に裸で運動場を走ることを命じ、憤慨した別の生徒から銃で殴打され、生徒は除名、草川も左遷されたという事実がある（『ああ青春デ・カンショ旧制高等学校物語』昭和43年、ノーベル書房、225～232頁）。
- 6) 松山航空隊当時、主計見習尉官第一種軍装で外出した和田氏は、官庁ビル街で女事務員数人から「海軍さん」と呼ばれ盛んに手を振られ、行合った陸軍少尉2人から「海軍はもててええのう」といわれた体験をしている（『白線と体験』240頁）。
- 7) 吉田満氏は「海軍魂といえば『スマートで目先がきいて几張面、負けじ魂、これぞ船乗り』という合い言葉」を紹介して、それが「矛盾だらけの注文」であるといひながら肯定的にうけとめている（「海軍という世界」『吉田満著作集』下巻702頁）。この言葉は部外にも流布していたといわれ、学生たちの共感を呼んだと思われる。
- 8) 1期生2,700名ほどが昭和18年10月、大刀洗・宇都宮・熊谷・仙台などの陸軍飛行学校に入校、2期生が19年2月、3期生が19年6月、4期生が19年8月から10月にかけて入校した。1～4期の入隊総数は、約7,500名と推定されている（『史』366頁）。
- 9) 昭和18年6月、徴兵検査で甲種合格、徴兵官より「お前の身体は、地上であそばせておくのは勿体ない。お前は海軍予備学生を志願せよ」とすすめられた中村純一氏は同年9月、特操1期、予備学生13期の双方に合格、特操をえらんだ（中村純一追悼録刊行委員会『或る学鷲の生涯』昭和53年、非売品321、343頁）。なお中村氏は昭和20年7月9日、大阪上空の戦闘で戦死した。このような例もあったことを附記する。
- 10) しかし、このようなやり方は予備学生に対してのみ加えられたともいえないであろう。昭和19年春、海兵73期を卒業し、飛行学生として霞ヶ浦航空隊に到着した502名のうち、第2飛行隊に配属された97名は、22名の海兵70期を中心とする教官から到着早々きびしい修正を受けた。とりわけ関行男中尉は「少尉候補生となった彼らを一人前の士官とも扱わない（中略）殴り方の烈しさ」で飛行科に転科してきた71期出身の学生長二階堂春水中尉に対してさえ加えられる「異様な制裁ぶりが飛行学生たちの話題となった」ほど、連日繰返されたという事実がある（森史朗『敷島隊の五人』昭和61年、光人社、10～36頁）。もちろん、かようなことは陸軍でもめずらしくなかった。昭和19年12月21日、特攻隊長として比島サンホセ沖に突入戦死した航空士官学校56期敦賀真二が夕食時、敬礼を忘れた57期生Kに必殺パンチを見舞い、一時的意識不明に陥れ、謹慎処分となった事例が伝えられている（喜田泰臣『殉義隊長敦賀真二』平成元年、ぎょうせい、269、278頁）。
- 11) 予科練すなわち飛行予科練習生は当初、中学校4年第1学期程度の学力を必要としたが、のち2年程度にまで切り下げられ、大量募集された。昭和19年度甲種78,027名、乙種36,746名、乙種(特)2,384名。昭和20年度甲種25,034名、乙種34,314名、総計176,505名が記録されている（国書刊行会『海軍飛行予科練習生』昭和58、国書刊行会、上135頁）。しかも海軍部内兵クラスから転科させた丙種は、これ以外に多数あった。まさしく「いくらでもいる」人数であった。
- 12) 海軍機関学校である。兵学校・経理学校と並んで海軍大臣に直属し「生徒3校」と呼ばれ、中学校第4学年修了以上の学力を有する者から選抜採用された。大正年間から京都府舞鶴に移され、卒業後、機関科少尉候補生となり機関中将まで昇進の途があったが、昭和19年、兵科将校との区別がなくなるに伴い、海軍兵学校舞鶴分校と改称され、終戦に至った（『国史大辞典』）。
- 13) 前記機関学校と同じく「生徒3校」のひとつ。卒業生は主計科少尉候補生となり、主計中将まで昇進の途がひらかれていた。予備でなく現役であった。
- 14) 乃木神社をたずね「武士は玉も黄金もなにかせむいのちにかへて名こそをしけれ」という乃木希典陸軍大将自作の歌の碑をみて、「命を捨てても、自分の名前だけは後世へ立派に伝へ残したい」との意味にとらえ「近代国家の軍職に在る者は（中略）自己に課せられたdutyを忠実に果すつもりなら名前の潔さは望めないと、覚悟の上、死地へ出て行った山本五十六（海軍大将、連合艦隊司令長官）」と対比させた上、「はしなく

も此の將軍（乃木大将）の俗な一面を見せつけられた気がした」という。そして、もし「あの世へ行って、黄泉のくにて乃木山本のどちらかと交り进行を結べと言はれたら、真珠湾騙し討ちの汚名を背負うて死んだ山本さんを私は選ぶ。乃木大将とお近づきになるのは遠慮したい」とのべた（『名こそ惜しめ』『文芸春秋』1998/8, 77頁）。甚大な犠牲を払い、2人しかいない長男・次男を戦死させつつ難攻不落の旅順城を攻略し、日露戦争を勝利にみちびく因をつくった乃木大将、明治天皇の知遇に感激して御大喪時夫人ともども殉死した乃木將軍を遇するにあまりにも苛酷な評言ではなからうか。山本五十六・米内光政・井上成美ら海軍大将に関する伝記風小説をものした氏の海軍びいきはともあれ、この評言は看過しかない蒙昧の文というべきである。死後、元帥（元帥は終身現役で天皇の軍事最高顧問の責あるため、陸軍ではいかに功績あるにせよ死後に贈ることは皆無であった。）となり、正3位に叙せられ大勲位・功1級となり、国葬の礼で送られた山本の“榮譽”も拝辞すべしとの言あってしかるべきではなかったろうか。しかし、このような盲目的ともいえるべき“海軍愛”は阿川氏にとどまらない。昭和18年2月、立命館大学法学部より海軍（予備学生？）を志願、回天の訓練を受け、戦後、防衛庁事務官として昭和31年8月より54年4月まで江田島教育参考館初代館長をつとめたのち、江田島町教育委員会委員長の任にあった岡村清三氏が大学における講演で「海軍兵学校（中略）あんな立派な学校は世界にもないと、英国人が本を書いております。知・徳・体という全人的教育において。だから陸軍と大部違うんです。紳士をつくって紳士が、いざ国が危ない時は銃を執れというようなことで性格が陸軍とは大分違うんです。同じ軍隊でもね。（中略）視野が違うんです。指導者は視野が広い人でないといけません」と堂々とのべるところにも露呈されている。幼年学校・士官学校について全く説明せぬまま、陸軍

に全人教育なく国家非常のとき先に銃をとらぬという驚くべき独断と偏見にみちた言葉である（『戦歿学徒の心』皇学館大学講座叢書・第80輯、45～46頁、平成7年）。

- 15) 予備学生13～15期に対応する海兵72～74期の卒業生数はつぎのごとくである。

期	卒業年月	人数	飛行学生数	飛行学生戦死者数
72	昭和18/9	625	301	197
73	19/3	901	462	94
74	20/3	1,027	約350	2

（後藤新八郎『海軍兵学校出身者の戦歴』昭和55年、原書房204頁）

- 16) この間の事情については、山極圭司『青春の戦史戦後史』（昭和51年、史記社）110～212頁にくわしい。なお小論「学徒出身見習士官の思想・素描」を参照。
- 17) 吉田満氏自身、大和乗艦当初、一少年兵の欠礼に対し通例の修正でなく、説諭ですませたところを見ていた白洲大尉から鉄拳を受けたことがあった。「貴様ノ言フコトモ一応ハ分ル（中略）貴様ノ兵隊ガナメテカランカドウカ（中略）軍人ノ真価ハ戦場デシカ分ランノダ」という理由であった（『戦艦大和ノ最期』『吉田満著作集』上巻、26～27頁）。
- 18) 横須賀第2海兵团（のち武山と改称）では「水兵服姿の新兵で海軍生活を始めねばならなかった（中略）出陣学徒にかなりの配慮をし」「出身大学別に分隊編成が行なわれた場合もあって、知的集団としての精神的ゆとりが持てる配慮がなされた」（蜷川寿恵『学徒出陣』1998、吉川弘文館、92頁）という。該当者である和田良信氏も「陸軍の内務班におけるような、人格を無視した奇妙な罰ちよくは最後まで無かった」（『白線と短剣』136頁）としている。

（平成10・8・25）